

人を育てる「まつり」の協働プロセス

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 所長 木全 吉彦 Written by Yoshihiko Kimata

はじめに

今回の特集テーマが「まつり」が育む地域の力」に決まったのは一昨年10月半ばでした。当初は本誌が創刊100号を迎えることへのささやかな祝祭という意味も込めて、歴史と伝統に彩られた「祭り」をイメージしていたのですが、3月11日の東日本大震災を受けてコンセプトを見直すことにしました。

震災直後には「発行がちょうど震災1周年の時期に当たると、『お祭り』を取り上げるのは不適切ではないか」と、まったく別のテーマへの変更も考えました。しかし、厳しい現実には耐えて困難に立ち向かい、復興に向けて歩を進める被災者の姿や、全国から被災地に入っているボランティアの支援活動を見聞きして思い直しました。

古今東西を問わず、たとえ束の間であっても「祭り」は人々の気分を高揚させます。大災害は大きく深い傷を被災地に残しましたが、それを克服して二度と同じ轍を踏まないようにするには、日本全体がもう一度心をひとつにして課題に立ち向かい、生活基盤を支える自助・共助・公助のバランスの取れた仕組みを構築しなければなりません。「祭り」というテーマは生かしつつ、「祭り」が人々や地域社会に及ぼす力を多面的にとらえて評価し、社会の仕組みとして積極的に活用をはかることがで

きないだろうか。それこそが震災後1年、「CEL」100号にふさわしいテーマではないかと思うに至ったのです。

七夕祭り

お盆前後、NHKのTV番組で被災地の夏祭りの様子をご覧になった方も多いのではないだろうか。東北地方は祭りの宝庫といわれ、青森ねぶた、弘前ねぶたをはじめ、各地にさまざまな夏祭りがあります。七夕祭りもそのひとつですが、ここで取り上げられたのは、有名な仙台の七夕ではなく、陸前高田市高田町の「動く七夕」、気仙町の「けんか七夕」などです。大切なものを失い、打ちのめされて避難所や仮設住宅などへ散り散りになった住民たちが、生きることだけでも困難な時期に、いや困難だからこそ集い、力を合わせていつもの祭りをやり遂げようと立ち上がり、行動を始めます。

祭りを通じて自分たちの暮らし、わがまちの復興・再生を誓う住民たちの姿・言葉は尊く、気高く、見る者の心を打ちます。また、津波によって破壊され、瓦礫以外は何もないモノトーンの空間を、住民たちの懸命の修復作業によって華やかに甦った山車が通り過ぎる光景は、凜として美しく、力強さに満ちていました。

人と人が助け合い、結びつき、社会を形づくって行く原始のプロセスがそこに再現されたように思い、同時にその呼び水となった「祭り」の持つばかり知れない力の大きさを感じました。

「祭り」と「まつり」

本号では、幅広い分野の専門家の方々に、さまざまな「まつり」と「地域の力」との関わりについて語っていただきました。

ここでは祭祀・祭礼としての「祭り」と区別して、ひら仮名の「まつり」を広く「人が出会い、共通の目的と時間と空間を共有すること、人・まち・社会とつながる、またつながりを確認する場」ととらえ、その力、可能性について考えてみたいと思います。

見渡してみると、世の中は「まつり」であふれ返っています。公園、商店街、観光地など色々な場所で、町内会、商工会、自治体、学校などさまざまな主催者が、季節や自然、折々の風物にちなんだ「まつり」を開催し、賑がはためき、人々が集まります。祭祀・祭礼ではないこれら「○○まつり」も「まつり」には違いありませんが、歴史や伝統の裏づけのない新興のまつりは、多くの場合、主催者と参加者とがはつきりと分かれた一過性のイベントになってしまいがちです。

一方、一部のスポーツイベント、コンサートに見られるように、グラウンドや舞台と客席の一体感が醸し出され、多くの人が共通の目的と時間と空間を共有する場となるケースもあります。それでは今回のテーマである「地



近年、観覧席は金属製の足場に、また看板は安全配慮から当時の半分のサイズに変わっている (提供:愛知県立旭丘高校)

域の力を育むまつり」と、一過性のイベントを分けるポイントはどこにあるのでしょうか。

原体験としての学校祭

「まつり」体験は人や地域によってさまざまなので、共通のイメージがわくよう、ほとんどの人が体験している高校の学校祭を例に考えてみたいと思います。私事にわたって恐縮ですが、「鯨光祭^{コウサイ}」というわが母校の学校祭を取り上げます。

「鯨」の訓読みはシャチ、そう「金のシャチホコ」のシャチです。

毎年10月に開催され、前夜祭に始まって体育祭・文化祭と続き、後夜祭まで1週間がかりの一大イベントです。実行委員会が立ち上がって準備がスタートするのは新学期が始まって間もない5月。最初は笛を吹く数人だけが熱くなっているのですが、時の経過とともに、どんどん一般の生徒までが巻き込まれて踊り出します。とりわけ新入生はいきなり未知の世界、驚愕の通過儀礼に放り込まれることになります。学校祭としては極端な例かも知れませんが、そこには「まつり」を考えるヒントが見え隠れしているように思われます。

中でも体育祭は、1〜3年の同じクラスがひとつの組(近年はタテと呼ばれる)を作って競技に臨むことに特徴があります。10あるタテが、グラウンドを囲んでやぐらや観覧席、大看板を並べ、応援団を擁して互いに競うのですが、当日の競技もさることながら、そこまでの道のりが大変です。何せ、やぐら作りは、まず柱にする竹を学校から15kmほど離れた山の中から切り出し、学校まで担いで(一)運ぶところから始まり、自分たちが座る観覧席も支給される材木を組み合わせて手作りします。ゴルフ競技で最終ホールに作られるものを想像してもらえばよいのですが、生徒の素人仕事なので出来栄はタテによってまちまちです。できの悪いやぐらは巡回してくる業者に何度もダメ出しされ、手直しをします。長時間、中腰の姿勢と大音声を強いられた応援の練習も、校内のあちこちで際限なく繰り返されます。

にわか仕立てのタテ組織ですが、徐々に指揮命令系統ができ、各人が

自分の役割を見つけて動き始めます。企画・指導の中心となるのは2年生で、まだ丸坊主からの髪の毛が伸びきらない1年生が作業のほとんどを担当します。開催直前の数日間は徹夜続きですから、心配した1年生の親からの問い合わせも多かったことでしょう。

※以上、ほぼ40年前の情景ですが、ブログで確認したところ現在も大きくは変わっていません。ただし、やぐらはなくなっているようです。

「まつり」を作り上げるプロセス

もちろん学校は地域ではありませんが、自宅や近隣とは別に生徒が3年間を過ごす場という意味ではひとつのコミュニティです。鯨光祭では、非日常的な「まつり」の時間・空間が生徒をより濃密なタテというコミュニティの構成員としてくくり、タテ対抗という競争原理、ゲーム性が誘引となって、互いを結びつけます。そのタテ・コミュニティの総体としての学校コミュニティが、確かに「まつり」の前後には存在し、その体験が毎年の新生入生に伝承されることで片や校風が維持され、片や「新入生」が立派な「在校生」に育って行くのです（日常的にはクラブ活動がありますが、その総体が学校コミュニティにならないのは想像がつくと思います）。

ここで重要なのは「まつり」を作り上げる一連のプロセスです。準備活動を通じてそれまで顔すら知らなかった先輩を身近に感じ、先輩が語る学校の歴史に思いをはせ、同時にクラスメートでありながら話をしたことがなかった仲間を知ることになります。後夜祭で大看板を燃やす炎を見つめながら、あるいはフォークダンスでの手と手の触れ

合いから生まれたように見えるカップルも、実はそこに至るまでのプロセスがあったのだらうと思います。非日常の時間・空間だからこそ解放感・達成感があり、コミュニティの一員であることを自覚する貴重な体験です。もちろん、

その多くはその場限りで消えてしまいましたが、間違いなく残って身につくものがあります。

「まつり」の本質

学校というコミュニティを「地域」に置き換えれば、本号で取り上げたさまざまな「まつり」に共通するものが見えて来ます。つまるところ、地域の力を育む「まつり」の本質は、まつりそのものの“ではなく”まつりを作り上げる協働のプロセスにあるのではないのでしょうか。そのプロセスを体験した人が学び、成長して、次にまた新しい世代に伝え、引き継ぐことで地域の力が維持されます。地域の力を育むとは、畢竟、地域コミュニティの構成員である人を育むことにほかなりません。家族やコミュニティ内で閉じた「まつり」であれ、一般に開放される「まつり」であれ、そのプロセスにどれくらい人を関与させられるかが、「まつり」の影響力を左右する重要なポイントとなりそうです。

非日常の時空間であり、五感・情緒に訴える「まつり」には、地域コミュニティの力を強めるソーシャル・キャピタルとして大きな可能性があります。また、こうして培われた地域の力は、一方では「まつり」を育て、継承して行く原動力になります。学びの場での「まつり」である学校祭ではそんな「まつり」と人・コミュニティの相互作用のメカニズムがよく見えるのかも知れません。

家族・コミュニティの崩壊、都市一極集中、少子高齢化と、「まつり」をめぐる環境はどんどん厳しいものになって行きますが、これらの問題に対処するためにも「まつり」の重要性は高まっています。地域での絆、つながりを強めるのに易き道はありません。身近な「まつり」は絶好のゲートウェイではないでしょうか。自宅マンションの餅つき大会の運営委員に名乗りを上げる、あるいは地元の高校や大学の学園祭を覗いてみる、そんなところから始めてみてはいかがでしょうかでしょう。